OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

香川大学経済論叢
第72巻 第1号 1999年6月 45-61

「文化」の翻訳

渡 邉 英 夫

はじめに

「文化の翻訳は可能か」という決定疑問文がある。啓蒙主義時代以降の近代国民国家の成立した現在，誰もこれがイデオロギー批判を排除した単なる翻訳をめぐる理論的反省の主題などとは考えない。まず文化の定義そのものが多岐にわたり，特に文化人類学の発展がそれを複雑にしている。さらに文明との関係も決して明確とは言えない。

ロベルト・クルチウスの『フランス文化論』は多くの文献の引用によって支えられてフランス「文明」を論じたものである。そこではドイツとの対抗関係の中で，フランスの「文化」概念がいかなるものかが定義される。さらに，「引用可能性は，たとえそれがどんなに弱いものであれ，文化間には透過性のあることを語っている」(三島憲一，p.57)とも言う。果たしてクルチウスはフランス「文化」をドイツ語でほんとうに伝えられたのか。また日本語訳とフランス訳をつきあわせて，著者のフランス語版に寄せた序文の意図である一般ドイツ人にフランスのことを分からせることが，果たされたのかどうかを明らかにしたい。下記の手順で論述する。

第一章：文化の特性の論述の可能性とその方法
第二章：「文化」概念のドイツとフランスにおける定義の対抗性
第三章：翻訳によって明らかになったもの

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

終　章：「おわりに」で「文化」の翻訳可能性

果たしてクルチウスの言うフランス文化とは。フランス文化の一般的な評価様式および観念体系の分析はフランス理解への入門となりうるであろうか。

1．文化の特性と論述の可能性，およびその方法

ある国民，あるいはある文化の特性を果たして抽出することが可能か。フランス論や，ドイツ論とは何か。ある国の文化論を論じる方法とは。もっと身近な例に例えれば，〈正しい〉日本人論あるいは日本文化論を書くことが出来るだろうか。また，書けるとすればそれはどのような視点から捉えられるのか。

1883年アルザスに生まれた—この年に注目されたい。1871年までアルザスはフランス領であった。—ドイツのすぐれたフランス学者であるローベルト・クルチウスは，1930年に発表した『フランス文化論』の中で，いわゆる〈フランス精神〉や〈フランス的なるもの〉の定義に見られる多くの偏見や独断を指摘し，フランス文化の特徴の再定義を試みている。そして，その第8章「フランス文化の特徴」の中で，フランス人自身による自己認識を超えるフランス像をいかに求めるかについて次のように述べている。

> 「ある個人または国民の最も本質的な特徴は，その人自身には自明的なものに思われ，これらの精神的アプリオーリが看過されることは当然である。とかく自己の心理解剖をするとき，最も重大な特性を忘れることが多いのはそのためであり，このような特性は，心理機構を豊かにする他の人間と比較するとき，はじめて明らかとなるのである。もとよりフランス人が自己について言っている言葉は，彼らの意識的性向と彼らの評価様式に関する限り，貴重な指標ではある。しかしこれを外部からの観察によって補うことが必要である。それゆえに，最も教える所の多いのは，外国文化を深く究めたフランス人—その数はあまり多くはない—の言葉，またフランス

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の習俗および人間性を深く究めた外国人—これもあまり多くない—の言葉である。」 (クルチウス，p. 270-271)

クルチウスは，この『フランス文化論』の他に，『バルザック』(1923年)，『現代ヨーロッパに於けるフランス精神』(1925年)の著書のある文字通り〈フランスの習俗および人間性を深く究めた外国人〉であった。

一方，同時代のフランス人であるポール・ヴァレリーが『フランス素描』(1927年)の中で，自国民のイメージを描く困難を次のように指摘している。

「フランスにせよ，これと同種の他の政治体にせよ，国家と呼ばれるものを明確に思い浮かべることは，つねに容易ならざる業である。或る国家のもっとも単純な，もっとも大きな特徴は，そうしたものを見馴れて無感覚になっているその国の人々の目には写らない。それに気がつく外国人は，あまりにもそれを強く感じ，何百万という人間の微妙な結合の神秘を成就させるあの内面的な性格や，目に見えぬ現実のかずかずを見落としてしまう。」 (ヴァレリー，p. 104)

確かにフランス文化を深く究めた外国人の視点にはそれに固有のゆがみがある。また，それらの外国人の証言もまた相互に矛盾するという事態が予想される。

こうしてクルチウスは，さまざまなフランス人の言葉を集めて，その互いに矛盾した意味内容や，あるいは述べられていないもの—彼らには自明とされるもの—だけでなく，その述べ方や歴史的な意味を問うことを主張し，そうすることによって〈フランス精神〉の自己認識の歴史を解きあかそうとした。併せて，イギリスやスペイン人などの考察を参考としながらフランス文化の意味を問うた。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

II.「文化」の概念とドイツとフランスにおける定義の対抗性

クルチウスは「フランス文化」の特性を述べるに当たって，その『文化論』を「フランスの文化概念」を明らかにすることによって始める。

まず，それは古代の文化概念として次のように定義される。

「古代の文化概念によれば，一切の文化財は一個の価値概念のうちに包括され，この総括概念は「ポリス」に，(或いはラテン語で言えば) civitas に，結びつけられるものであった。

かくて「文明」人類という観念が生じ，この観念は「自然」に対比され，まだ自然状態に置かれている生活—すなわち「野蛮」—に対比されるものであった。人間を当初の自然状態から引き上げる一切のもの，人間をして自然界の支配者たらしめる一切のもの，それが文化である。それら一切のものは同様の重要性，同様の価値を有する。それが衣食住に関するものであろうと，読み書き算数であろうと，また法律や習俗であろうと，文化である点に何の違いもなかった。かかる文化概念においては，外的生活の組織を支配する諸形式は，自然科学の諸要素あるいは人間共同生活の諸法則に比して，少しも劣らぬ価値を有していた。物質的要素の満足，技術的能力の発展，さてはまた社会秩序の組織，認識力の錬磨，それら一切のものが集まって甫めてこの文化概念を構成するのであった。

かかる古代の文化概念がローマの血となり精神となり，それがさらにフランスに継承されたのである。」　(p. 10)

一方ドイツについてクルチウスは，まずウィルヘルム・フンボルトのドイツ古典期の意識に適合するドイツ新人文主義の定義を掲げる。

「つまり文明とは，人間が社会的となり教化醇化されることであるが，これよりも高いところに，全く自主独立の創造的精神の王国が屹立している。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

これのみが文化の名に値する，というのである。」 (p. 6)

また，エマニュエル・カントも「文明」に対する反措定としての「文化」の主張を次のようにしている。

「我々はいま技術と科学とによって高度の文化に達している。我々はまた諸般の社会的な礼儀や都雅の風に関して，煩わしいまでに文明化している。しかし我々自身をすでに道徳的にも教化されていると見なすには，まだ甚だしく欠けているのである。文化は，更に道徳性という理念を必要とするからである。とは言えこの理念を適用するに当たって，名誉心やうわべだけの礼儀などに見られるいわば道徳めいたものを旨とするならば，やはり単なる文明化に終わるであろう。いずれにせよ諸国家が，強力を行使して権力の拡大を図ろうとする虚栄的な意図の実現に全力を傾け，国民が緩慢にもせよ自分たちの思想を内面的に形成しようとする努力をしじゅう阻害し，そのうえ国民のかかる意図の実現を助成するための手段を国民から悉く奪い去ろうとたくらむ限り，国民の思想的成熟はまったく期待さるべくもない，およそ国民の教化を達成するには，公共体は長期に亙って自分自身に精神的訓育を施さねばならないからである。」 (p. 40-41)

さらにニーチェの〈ディオニソス的＝悲劇的〉予言に基づいて，「文化」と「文明」の目的の異なることが明らかにされ，フランスとドイツの文化と文明の概念の異なることが明言される。

「こうしてドイツ側でもフランス側でも，この二つの言葉，二つの概念は対立の位置に置かれることとなった。この対立を認める点では両国いずれも同じであるが，その評価は正に反対であった。我々ドイツ人は文化を文明の上に置き，フランス人は文明を文化より高く評価する。」 (p. 7)

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ノルベルト・エリアスも述べるようにフランス語の「文明」は政治的，経済的，宗教的，技術的，道徳的，社会的等々の広範な事実にかかわっているのに対し，ドイツ語の「文化」は，その核心において精神的，芸術的，宗教的な事実に関係し，政治的，経済的，社会的事実とのあいだの強調が隔壁を設けている。(西川長夫，p. 145)

エリアスはさらに，シュペングラーの「野性の花」を挙げて，文化が人間が現に存在している生産物，一民族の特性が表現されている芸術作品，書物，宗教的もしくは哲学的体系に関係していて，限界を行うのに対して，「文明」を人類や民族の進歩の過程とその結果を示すものと定義する。(p. 70)従って「文明」とはすべての人間に〈共通〉のものをさす。

> 「次には大革命という歴史的大事件がこれらの要素をふたたび集結した。大革命に対する批判はどうあろうとも，これが国民を造りなおし国民的使命の観念を喚起した点で絶大な意義のあることだけは否定し得ない。諸外国を相手の多年にわたる戦争の間に，フランスの近代的国民意識は形成された。そしてこの時もまたフランスはその国民的目的に普遍的なモットーを与えた。すなわち civilisation (文明) である。」
>
> (クルチウス，p. 20-21)

フランスでは貴族と市民層との隔壁が低く，互いの交流が見られ，市民層が貴族や宮廷の価値観を受け継ぐことが容易であった。そしてフランス革命はその融合をさらに進めることになった。「文明」はフランスの国民的な言葉となったのである。

これに反して「文化というドイツ語の概念は，国民の相違，グループの独自性を特に強調する」と，エリアスは述べる。ドイツでは貴族と市民層の間に超えられない壁があり，「文化」は中流階級の知識層にとって，その概念形成がされたのである。「文化というドイツ語の概念は，国民の相違，グループの独自性を特に強調する。」(エリアス，p. 71)

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

「十八世紀のこの中流階級が自らを証明するもとになるもの，すなわちかれらの自意識，かれらの誇りを基礎づけるものは，経済と政治の彼方にある。それは，まさにそれ故にドイツ語で，「純粋に精神的なもの」と名づけられるものの中に，書物という領域の中に，学問，宗教，芸術，哲学の中に，そして主として書物を媒介にしての，個人の「教養」の内面的拡充，すなわち人格の中にある。このことに相応するのは，ドイツ知識層のこの自意識が表現される場合の合言葉，「教養」とか「文化」といったような合言葉が，フランスとイギリスにおける台頭しつつある市民階層の合言葉とは全く対照的に，上述の領域での業績，すなわち純粋に精神的なものと，一方，政治的なもの，経済的なもの，社会的なものとの間に，明確な一線を引こうとする非常に強い傾向を示していることである。ドイツ市民階層の固有の運命，その長い政治的無力，国家統一の遅れ，これらすべてがその後つねに新たに，これと同じ方向の刺激を与え，そしてこれと同じ方向の概念，理念を確定した。これらをまずこの形で軌道に乗せたのは，大きな社会的後背地を持たないこの独特のドイツ知識層であって，かれらはドイツにおける最初の市民層として，はっきりと市民的な自意識，とりわけ中流階級的な理想，および宮廷上流階級に向けられた意味深長な概念の武器庫を発展させたのである。」 (エリアス，p. 103)

そしてフランス革命を経験したフランスに，ブルジョア自由主義の歴史哲学を「文明」概念にそって発展させたのがフランソワ・ギゾーであった。彼は〈進歩〉と〈発展〉が「文明」の基本的な概念であることを述べて，一見相反する自由主義と国民主義を強調する。さらに，その『ヨーロッパ文明史』(1828年)や『フランス文明史』(1830年)の著作が示すとおり，文明の諸要素の〈多様性〉と〈自由〉の産物としての「ヨーロッパ文明」を主張するのである。

「ギゾは文明をもって社会的および精神的進歩なりとした。曰く，文明はアジアに欠けているところの自由への趨向を，前提とする。ゆえに，文明

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

は特にヨーロッパ的な現象である。しかしヨーロッパ大国民のすべてが文明発展に協力したりとはいえ，その指導権を執るものはフランスである。(....) 他国に発展した文明思潮も，一度フランスを通ってから甫めて決定的形態を取るのが常であった。このことはフランス精神の三つの本質的特徴によって説明される。すなわち明晰と社交性と共感。ゆえにフランスは文明の心臓である。」　(クルチウス，p. 22)

「わたくしはヨーロッパ文明と申しました。ヨーロッパ文明というものがあること，ヨーロッパの様々の国家の文明の中に一種の統一性が顕著であること，時と処と事情の点で大いに多様でありながらどこにおいてもこの文明はほとんど相似た事実から生じ，同じ原理に連繋し，ほとんどどこにおいても類似の結果を惹起する傾向を有すること，これは明白であります。ゆえにヨーロッパ文明というものは存在するものでありまして，わたくしが諸君の心をもっぱら向けようとするのはその総体に対してであります。」
(ギゾー，p. 3)

こうして，ギゾーはローマ帝国崩壊からフランス革命にいたる文明史を論じることにより，ブルジュワ革命としてのフランス革命を擁護した「文明」の名によって近代的な国民国家形成の軌跡を語り，ブルジュアジー権力の正当性を主張した。この『ヨーロッパ文明史』には「文化」という言葉がまったく使われなかった。そして，

「ドイツの文化概念は，ロマン主義を経過することによって，啓蒙主義から反啓蒙主義へ，合理主義から神秘主義へ，世界市民主義からナショナリズムへの大転換を行ったのである。そしてドイツにおけるこの動きは，フランスの「文明」概念がその拡大主義的，帝国主義的な方向性をあらわにするのに対応していた。フランス革命の末期には，「文明」はすでに先進国の国家イデオロギー（ナポレオン）の特色を示し，「文化」は後進国の反動

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

的な国家イデオロギー的な特色を現しはじめている。国家による「文化」と「文明」の対抗概念としての方向づけは，革命末期からロマン主義の時代にかけてほぼ決定されたとみてよいであろう。」

（西川長夫，p. 165-166）

III．翻訳によって明らかになったもの

『フランス文化論』の第一章は次のように始まる。

「ドイツ人とフランス人が相手国の心理的特徴を理解しようと努めるとき，しばしば根本的な喰違いが生ずるのは，両方とも自国の文化の価値尺度を一意識的にしろ無意識的にしろ一相手国の文化に当てはめようとするからである。」 (p. 3)

そして，いくつかの典型的な例証を挙げて，この事実の明白であることを述べている。さらにその数頁後では，

「外国文化というものは，その個々の内容を知っているというだけでは分かるものではない。その文化の内部機構を知り，またその国民がその文化をどう考えているかを知ることが必要である。ドイツの文化概念とフランスの文化概念とはその根底からして違っている。この点を看過すると根本的誤謬に陥り，次から次へと無数の誤謬が必然的に生じる。」 (p. 6)

〈個々の内容〉や〈内部機構〉だけでなく，自ら〈その文化をどう考えているか〉を知ることが誤謬を避ける唯一の方法であって，続けて次のように説明される。

「文化概念に関する相互の無理解は，戦時中ドイツ・フランスの両国で際限もない論戦を惹き起し，（...）両者の見解の相違はついに文化と文明と

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の対立とまでなった。この対立はドイツおよびフランスの戦争文学において随分と取り扱われたものであるが，しかしこれは戦争で初めて生まれたものではなく，きわめて多岐の歴史的根源を有するものである。」（p. 6）

ところで，ここに引用したクルチウスの二つの文章のドイツ語のテキストとそのフランス語訳は下記のようになる。（下線は筆者による。）

Wenn Deutsche und Franzosen sich bemühen, die psychologische Eigenart der anderen Nation zu verstehen, ergeben sich oft Mißverständnisse grundlegender Art, weil jeder der beiden Partner das —latente oder bewußte—Wertsystem seiner Nationalkultur als Maßstab an die Fremdkultur heranträgt. (p. 1)

Il n'est pas rare de voir surgir des malentendus d'ordre fondamental, lorsque Français et Allemands s'efforcent réciproquement de comprendre la psychologie particulière de leurs nations ; car chacun des deux interlocuteurs a tendance à appliquer à la culture qui lui est étrangère, l'échelle de valeurs consciente ou inconsciente—que lui fournit sa propre culture. (p. 17)

Man versteht eine fremde Kultur nicht, wenn man nur ihre einzelnen Inhalte kennt. Man muß ihre innere Aufbauform und ihre Selbstauffassung begreifen. Der deutsche und der französische Kulturbegriff sind schon in ihrer Wurzel verschieden geartet. Wenn man dies übersieht, gerät man in einen Grundirrtum, aus dem sich mit Notwendigkeit unzählige andere ergeben.

Es handelt sich dabei nichit um eine Angelegenheit von bloß theoretischem Interesse. Ganz im Gegenteil. Das Mißverstehen der gegen-

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

seitigen Kulturideen hat in Deutschland und Frankreich während des Krieges zu einer nicht endenwollenden Polemik geführt, es hat sich politisch aber auch ausgewirkt in der Austlandspropaganda unter den Neutralen und in der amtlichen Kulturpolitik beider Länder. Der Unterschied der beiden Auffassungen spitzte sich zu in der Antithese Kultur und Zivilisation. In der deutschen wie in der französischen Kriegsliteratur ist dieser Gegensatz oft genug verhandelt worden. Aber er ist nicht erst eine Schöpfung des Krieges. Er hat weitverzweigte, geschichtliche Wurzeln. (p. 3)

Il ne suffit pas en effet, pour comprendre une culture étrangère, d'analyser les divers éléments qui la composent. Il faut encore connaître sa structure intime, et la conscience qu'elle prend d'elle-même. Les conceptions française et allemande de civilisation sont différenciées dès leurs racines. Méconnaître ce caractère profond de leur nature, c'est s'exposer à une erreur fondamentale, d'où découleront fatalement une infinité d'autres erreurs.

La compréhension de ces choses n'est pas, quoi qu'on pense, une entreprise dont l'intérêt soit strictement théorique. Bien au contraire. L'incompréhention réciproque des idées de civilisation a suscité pendant la guerre, en Allemagne comme en France, une polémique interminable ; elle s'est manifestée dans la propagande étrangère auprès des neutres, et dans la diplomatie officielle des deux gouvernements. La différence des deux conceptions a fini par dresser l'une contre l'autre la notion de culture, et celle de civilisation. Les littératures de guerre française et allemande ont suffisamment fait état de cette opposition. Pourtant celle-ci n'est pas une création de la guerre. Elle a des racines historiques extrêmement ramifiées. (p. 20-21)

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

いずれもドイツ語で〈Kultur〉となるところ—これは日本語訳ではすべて「文化」と訳されている—は，フランス語では〈culture〉となっている。しかし「文化概念」である〈Kulturideen〉は，フランス語訳では〈idées de civilisation〉となることに注目されたい。

すでに前章で明らかなように，古代の概念定義においては同じものを指していた「文化」は18世紀後半のヨーロッパの中心的な国々での市民社会の形成のなかで「文化」と「文明」に二分化されていった。「文化」と「文明」はドイツ人やフランス人の国民意識の違いと，彼らが世界を全体として考察するやりかたの違いの反映となっていた。

しかし，7月王政から第3共和制と推移した19世紀を通してフランスの「文化概念」は再び古代のそれにもどった。

「フランスの文化概念は再び古代のそれに帰ったのだ。フランス人にとって文明という言葉に表現されているものは，古い神聖な歴史なのである。」
(クルチウス，p. 29)

Die französische Kulturidee nimmt die der Antike wieder auf. Es ist eine alte ehrwürdige Geschichte, die sich für den Franzosen in dem Wort Zivilisatin verkörpert. (Curtius, p. 19)

古代の理想に還った〈Die französische Kulturidee〉(日本語訳「フランスの文化概念」)は，まさにフランス人にとって〈文明という言葉 Wort Zivilisation〉なのである。

さらに，フランスは11世紀以来その国民的歴史に一個の理念を与えんと欲してきた。そのために自己を表現するための形象や公式や言葉が求められたが，それらは歴史の過程中に幾度か内容をかえた。しかしその種々の内容も一つの構造図式にあてはまった。その構造図式として，クルチウスは第一に考えられることとして，フランスでは「国民観念と文化観念とが全く同一なることであ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

る。フランスに関する限り，国民国家と文化国民との相違は成立しない」と述べ，つづけて「国家と国民と文化とはフランス人の意識では分離し得ざる一体なのである」と断言している。

> Was sich der Analyse zunächst aufdrängt, ist die volkommene Dekkungvon Nationalidee und Kulturidee, Der Unterschied von Staatsnation und Kulturnation bestecht für Frankreich nicht. Staat, Nation, Kultur sind für das französische Bewußtsein im Erlebnis nicht trennbar.
>
> (Curtius, p. 20)

クルチウスはフランスの文化の特性を述べるに当たって，くり返しフランスの文化がドイツの文化とは異なる「文明」であることを述べるわけであるが，それを承知のうえであえて〈文化国民 Kulturnation〉を用い，前文まででその相違が明言された「文化」を国家や国民と並べている。これこそが正にドイツ的な規定そのものである。そしてその概念規定の一貫性がクルチウスのこの論述の説得性を失わせていると言わざるを得ない。さらにこの箇所の〈kulturidee〉および後述の〈Kultur〉は，フランス語訳では前者が〈l'idée de civilisation〉になるのは当然であるが，後者の〈Kultur〉がそのまま〈culture〉であるのはフランス語の論述としては通らない。

> Die deutsche Kultur ist sich niemals als nationaler Körper gegeben. Und ferner: die deutsche Kultur ist eben die deutsche Kultur und bezeichnet sich selbst als solche. Diese Ausdruchsweise ist ja selbst ein Grund für den Konflikt zwischen Zivilisationsbegriff und Kulturbegriff gewesen. Denn wenn wir von deutscher Kultur sprechen und der Franzose das mit "culture allemande" übersetzt, so klingt das für sein Ohr notwendig wie eine Negation der Kulturidee überhaupt. Kultur muß ja wesensmäßig universal sein, muß einen allgemeinmenschlichen

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

Gehalt haben. Wie kann man denn dann, so denkt der Franzose, eine nationale Kultur verkünden und propagieren wollen? Das ist für französisches Empfinden ein Widerspruch, ja eine Herausforderung. Wenne Frankreich sich mit seiner Kulturidee identifiziert, so spricht es niemals von französischer Zivilisation, sondern von Zivilisation schlechthin. (Curtius, p. 21)

ドイツの文化は国民的文化であって，普遍性を主張しないが故に，フランス人はドイツ「文化」にフランス語の〈culture〉を用いてドイツ文化を表すことはできない。ドイツ人と違って，フランス人にとっては〈culture〉は「文明(civilisation)」そのものであって，フランスの「文化」とは「文明」であるからである。クルチウスはドイツ語の〈kultur〉はドイツの「文化」を表すときにはドイツ的概念によるところの「文化」を示し，フランス「文化」を言うときには，ドイツ文化を論じる時のフランス文化との対抗性を意識した上で同じ〈Kultur〉を用いる。その意味でドイツ語で述べる時の「文化概念」もまた，フランスに関しては「文明概念」と読み替えなければならない。

おわりに

翻訳はかつて，ある特殊なコンキストにおいては〈不実な美女〉と見做されていた。そして，しばしばイタリアの諺「翻訳者は裏切る者，traductore-traditore」が引用された。

文化人類学者クライド・クッラクホーンはこの翻訳について次のように書いている。

「翻訳には三種類ある。まず文字通りの，逐語的な翻訳があるが，これは両方の言語が構造と語彙の点でよく似ている時以外には，かならず歪曲されたものになる。次は公式型の翻訳であり，同義語に関するきまった慣用が重んじられているものである。第三の心理的な翻訳は，翻訳する側の言

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

語を使う人の心の中に，翻訳される側の言語が生んだ効果と同じような効果を生じさせようとする翻訳であるが，これはまず不可能に近い。」

(p. 158)

クラックホーンは，ただ第二の慣用語句対慣用語句訳にしか翻訳の可能性を認めていないようだ。確かに外国語・母国語の双方に主観的な要素の入り込む余地のない科学的・技術的な分野では語彙の物理的移行によってコンテキストの伝達にも不都合はない。

しかし，第二の場合はいわば例外であって，ほとんどの翻訳は語彙の表面に現れた部分だけのものでは行われない。元来，意味には必ず辞書的な意味とは別に言外の意味の二つの領域があるから，いわゆる辞書的な意味で行われる逐語訳では事物の関係概念を表す含蓄は伝えられない。第三の心理的翻訳では言外の文化的意味伝達の不可能を述べている。

「言葉の翻訳は，語彙の表面に現れた部分のみの翻訳ではなく，その底に流れている心理や論理の翻訳がまず行われた上でなければならない」(池田摩耶子，p. 22) が，そのためには我々が外国語を翻訳する際の必須要件はまず母国語に通暁していることということになる。そして特定の言語を母国語とする翻訳者は，当然その母国語とその文化的制約のなかで自己規制がされている。従ってこの文化的存在者である翻訳者は他の言語で自己確認することは出来ない。言語が違うと外界の事実を見る目も異なるものとなる。

膨大な『文明化の過程』を書き，文字通り「文明」化の過程より「文化」と「文明」の違いを解きあかしたエリアスは，その執筆の成果とは裏腹に，はからずも次のように述べている。

「ドイツ人は，必要とあらばフランス人とイギリス人に，自分が「文化」という概念をどういう意味で用いているのかを，説明しようとするかもしれない。しかし彼は，とりわけ国民的な経験伝統について，また，彼にとってはこの言葉にまつわりついている自明の感情価値について，ほとんど何

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

も相手に伝えることはできないのである。」 (p. 72)

しかし，それぞれの言語のもつニュアンスや含意や，それに伴う文化的・社会的背景は別の言語でも決して説明できないわけではない。互いの言語干渉作用が起きにくいだけに一層正確になるとも言える。クルチウスの主張する「フランス文化」がドイツの文化概念とは異なる「文明」であることを，ドイツの文化を論ずる文脈では言語化し得ないことがフランス語訳を介して明らかになる。エルバーフェルト・ロルフの次の言葉が改めて想起される。

「翻訳は新しい次元の中への〈原文〉の〈止揚〉である。翻訳した〈テキスト〉は原文に呼応して，原文は新しい真理において出現する。」

(p. 225)

(1999. 1. 25)

参 考 文 献

Curtius, Ernst-Robert *Die Französische Kultur, eine Einführung*, Francke Verlag, 1975 (“*Essai sur la France*” traduit par J. Benoit-Méchin, éditions de l'aube, 1995 / E. -R. クルチウス，大野俊一訳『フランス文化論』，みすず書房，1977)

Guizot, François *Histoire de la civilisation en Europe*, Hachette, 1985 (フランソワ・ギゾー，安土正夫訳『ヨーロッパ文明史』，みすず書房，1987)

Elias, Norbert *ÜBER DEN PROZESS DER ZIVILISATION*, Francke Verlag, 1969 (ノルベルト・エリアス，赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳『文明化の過程』上・下，法政大学出版局，1987)

Valéry, Paul *Images de la France, “Œuvres II”*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971 (ポール・ヴァレリー，鈴木力衛訳「フランス素描」，『ヴァレリー全集』12，筑摩書房，1968)

クラックホーン，クライド　外山滋比古・金丸由雄訳『文化人類学の世界　人間の鏡』，講談社現代新書，1979

エルバーフェルト，ロルフ　「文化とモナドロジー」，大橋良介編『文化の翻訳可能性』，人文書院，1993

カント，エマニュエル　「世界公民的見地における一般史の構想」，篠田英雄訳『啓蒙とは何

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

か』，岩波文庫，1974
ニーチェ，フリードリッヒ・ヴィルヘルム 「反時代的考察」，小倉志洋訳 『ニーチェ全集』4，筑摩書房，1993
三島憲一 「弱い透過性—クルトゥラリスムを越えて」，大橋良介編『文化の翻訳可能性』，人文書院，1993
池田摩耶子 「翻訳と「文化の伝達」」『文学』vol. 48，岩波書店，1980
西川長夫 『国境の越え方』 筑摩書房，1992